目次

第一講　演習問題一・二・三……p. 2
第二講　演習問題一・二……p. 12
第三講　演習問題一・二・三……p. 18
第四講　演習問題一・二・三……p. 32
第五講　演習問題一・二……p. 44

第一講　演習問題 一・二・三

一

次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。（なお設問の都合で、返り点、送り仮名を省いたところがある。）

管(くわん)仲(ちゆう)、隰(しふ)朋(ほう)、従ヒテ二於桓(くわん)公(こう)ニ一而伐ツ二孤(こ)竹(ちく)ヲ一。春往キテ冬反。1迷惑失道。2管仲曰ハク、3老馬之智可キレ用フ也ト。乃チ放チテレ馬ヲ而随レ之ニ、4遂ニ得タリレ道ヲ。行クニ二山中ヲ一無シレ水。隰朋曰ハク、蟻ハ冬ハ居リ二山之陽(みなみ)ニ一、夏ハ居ル二山之陰(きた)ニ一。蟻(ぎ)壌(じやう)一寸ニシテ而有リレ水ト。乃チ掘リレ地ヲ、遂ニ得タリレ水ヲ。以テスルモ三管仲之聖ト而隰朋之智ヲ一、5至其所不知、6不難師於老馬与蟻。今(きん)人(じん)不レ知ラ下以テシテ二其ノ愚心ヲ一而師トスルヲ中聖人之智ヲ上。不二亦過(あやま)タ一乎(や)。

（『韓非子』説林・上）

（注）○管仲・隰朋――春秋時代の桓公の名臣。
○桓公――斉の国の王。
○孤竹――河北省に存在した国の名。
○蟻壌一寸而有水――蟻塚が高さ一寸ならば、その下に水がある、の意。
○管仲之聖而隰朋之智――この「而」は「与」と同義。

問1　傍線部１「反」と同義の漢字を次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　転　②　対　③　帰　④　逆　⑤　終

問2　傍線部２「迷惑失道」の解釈として最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　だまされてわけがわからなくなった。
②　迷って道がわからなくなった。
③　惑わされて死んでしまった。
④　悩んで生き方がわからなくなった。
⑤　困って道理を見失った。

問3　傍線部３「老馬之智」とあるが、老馬にはどのような知恵があるのか、簡潔に説明せよ。

問4　傍線部４「遂」と同じ読みをする漢字を次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　漸　②　凡　③　即　④　終　⑤　適

問5　傍線部5「至其所不知」の読み下し文として最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　その知らざる所に至りては
②　その至る所を知らざるに
③　至りてその所を知らずして
④　至りてその知らざる所を
⑤　知らざるその所に至りなば

問6　傍線部6は「老馬と蟻とを師とするを難らず」と読む。この読みにしたがって返り点を施せ（送りがなは不要）。

不　難　師　於　老　馬　与　蟻　。

問7　この文章の主題として、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　今の人が聖人の知恵ではなく、老馬や蟻の知恵から学ぶのは愚かなことである。
②　今の人は愚かであるから、聖人の知恵に学ぶ前に老馬や蟻から学ぶべきである。
③　聖人の知恵は老馬や蟻の知恵よりはるかに優れていることを、愚かな今の人は知らない。
④　老馬や蟻などの生物の知恵が最も優れており、今の人は積極的にその知恵を活用すべきである。
⑤　老馬や蟻からも学ぶことはあるのだから、今の人が聖人の知恵から学ばないのは間違っている。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある)

臣聞、求木之長者、必固其根本、欲流之遠者、必浚其泉源、思国之安者、必積其徳義。源不深而望流之遠、根不固而求木之長、徳不厚而思国之治、雖在下愚、知其不可。(1)而況於明哲乎。人君当神器之重、居域中之大、(2)将崇極天之峻、永保無疆之休。不念居安思危、戒奢以倹、徳不処其厚、情不勝其欲、斯亦伐根以求木茂、塞源而欲 (3) 長者也。凡百元首、承天景命、莫不殷憂而道著、功成而徳衰。有善始者実繁、能克終者蓋寡。豈其取之易而守之難乎。昔取之而有余、今守之而不足、(4)何也。夫在殷憂、必

竭(つ)クシテレ誠ヲ以テ待チレ下ヲ、既ニ得タレバレ志ヲ則チ縦(ほしいまま)ニシテレ情ヲ以テ傲(おご)ルレ物ニ。竭クセバレ誠ヲ則呉越モ為リ二一体ト一、傲レバレ物ニ則骨肉為二行路一。

（魏徴「論二時政一疏」による）

注 下愚……とてもおろかな人。ここでは自身を指す。　当神器之重……帝位にあること。　居域中之大……天下に君臨すること。
崇極天之峻……君主として徳義を高めること。　保無疆之休……終わりのない平安を維持すること。　凡百……さまざまな。
景命……大いなる天命。　殷憂……深く心配すること。　道著……道徳的に優れていること。　待……対応すること。
呉越……敵対関係の例え。　骨肉……肉親。　行路……通行人。

〔問一〕 傍線(1)「而況於二明哲一乎。」の解釈としてもっとも適当なものを次の中から選びなさい。

A 賢者の場合でも不可能である。
B 賢者になることは無理である。
C 賢者の場合はなおさらである。
D 賢者のようになれるだろうか。
E 賢者の場合にはどうだろうか。

〔問二〕 傍線(2)「将崇極天之峻、永保無疆之休」は、「まさにきよくてんのしゅんをたかくし、ながくむきやうのきうをたもたんとす」と読む。これに従って、「保」字の下に付く返り点を書きなさい。（返り点以外に何も書かないこと）

保

〔問三〕 空欄(3)に入る漢字としてもっとも適当な一文字を本文中から抜き出して書きなさい。（漢字以外に何も書かないこと）

〔問四〕 傍線(4)「何也」の読みを、送り仮名も含めて全て平仮名で書きなさい。（平仮名以外に何も書かないこと）

〔問五〕 本文の内容に合致するものを次の中からひとつ選びなさい。

A　君主が国土の保全に努め、山林、河川、道路を適切に維持するのは、統治の基本である。
B　人間性の高い君主ならば、自分の思い通りに行動しても権力が不安定になることはない。
C　君主というものは、常に国のことを考える立場なので、心配から解放されることはない。
D　さまざまな君主が、権力を手にした後で、態度や行動をよくない方向に変化させている。
E　君主が気前のよさを見せると人々は安心するので、国家は安定を維持する方向に向かう。

三　次の文章は、丹薬をつくる過程で人が誤ってそれを服用した事故をめぐる話である。これを読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。

予中表兄(注1)李善勝、曾与数年輩錬朱砂(注2)為丹(注3)。経歳余、因沐砂(注4)再入鼎、誤遺下一塊。其徒丸服之、遂発懜冒(注5)、一夕而斃。朱砂至良薬、初生嬰子可服、因火力所変、遂能殺人。以(1)変化相対言之、既(注6)能変而為大毒、(2)豈不能変而為大善。既能変而殺人、則宜有能生人之理。但未得其術(3)耳。以此知(4)神仙羽化(注7)之方、不可謂之無、然亦不可不戒也。

（『夢渓筆談』による）

（注）
1 中表兄——いとこ。
2 朱砂——硫化水銀。加熱すると水銀に変化する。不死の仙人を目指す錬丹術において薬材としてよく使われた。
3 丹——服用すると不死になれるという丹薬。
4 沐砂——丹薬を錬成する工程の一つ。砂は朱砂のこと。
5 懜冒——昏睡状態に陥ること。
6 既——～であるのだから。
7 羽化——羽が生えて仙人になること。

問

（A）═線部の「遂」と同じ読みの文字一つを、次記各項の中から選べ。

1　卒　　2　已　　3　常　　4　将　　5　与

（B）──線部(1)について。その例に該当するものとして最も適当なもの一つを、次記各項の中から選べ。

1　朱砂は大毒にもなれば、大善にもなる。
2　長く生きる人もいれば、早く亡くなる人もいる。
3　薬の作用はそれを服用する人によって変化する。
4　朱砂は人を仙人にもすれば、若返らせもする。
5　薬の力が強いほど、早く仙人に変わる。

（C）──線部(2)の訓読として最も適当なもの一つを、次記各項の中から選べ。

1　なんぞへんずるあたはずしてたいぜんとならんや
2　なんぞよくへんじてたいぜんとならざらんや
3　あにへんずるあたはずしてたいぜんとならんや
4　あによくへんぜずしてたいぜんとならんや
5　あにへんじてたいぜんとなるあたはざらんや

（D）――線部(3)の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

（E）――線部(4)の解釈として最も適当なもの一つを、次記各項の中から選べ。

1　いったん仙人になった後でも、無為に過ごすと人に戻る
2　仙人になる処方は、無いと言うしかない
3　仙人になるのは、無の境地に至ることを言うのではない
4　仙人になる処方は、無いとは言えない
5　薬の力で仙人になろうとする人がいなくなるわけではない

（F）本文の内容と合致するもの一つを、次記各項の中から選べ。

1　朱砂は、赤ん坊は服用できるが、大人が服用するのは危険である。
2　李善勝は仲間をだしぬいたため、とうとう仙人にはなれなかった。
3　火の力は人を死なせてしまうほど恐ろしいものである。
4　人を死なせる力を持つ物質を用いて人を生かすという方法は未確立である。
5　人を生かす道理は、仲間を犠牲にしてはじめて獲得されるものである。

第二講 演習問題 一・二

一 次の文章を読んで、問いに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した部分がある）。

孔子自衛反魯、息駕乎河梁而観焉。有懸水三十仞、圜流九十里。魚鼈弗能游、黿鼉弗能居。有一丈夫、方将厲之。孔子使人止之曰、「此懸水三十仞、圜流九十里。魚鼈弗能游、黿鼉弗能居也。意者難可以済乎。」丈夫①不以措意、遂度而出。孔子問之曰、「巧乎。有道術乎。②所以能入而出者何也。」丈夫対曰、「始吾之入也、先以忠信。及吾之出也、又従以忠信。忠信措吾躯於波流而吾不敢用私。所以能入而復出者、以③此也。」孔子謂弟子曰、「二三子識之。④水且猶可以忠信誠身親

之、而⑤況人乎。」

（『列子』）

注　衛・魯＝春秋時代の国名。　河梁＝河に架かる橋。　懸水＝滝。
仞＝長さの単位。一メートル余り。　圜流＝渦巻く流れ。　黿・鼉＝どちらもすっぽんの類。
鼉＝ワニの一種。　丈夫＝男。　道術＝仙術。方術。

問1　傍線①の「不以措意」の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1　孔子から言われたことが気になっている
2　孔子から言われたことの意味が分からない
3　孔子から言われたことを全く気にかけない
4　孔子から言われたことをよく理解している
5　孔子から言われたことに疑問を持たない
6　孔子から言われたことを試そうと思っている

問2　傍線②の「所以」、⑤の「況」の読み方を、送りがなも含めて、それぞれひらがなで書け。

②＝

⑤＝

問3 傍線③の「此」は何を指すのか。最も適当と思われることばを、本文中からそのまま抜き出して、漢字三字以内で書け。

問4 傍線④の「水且猶可以忠信誠身親之」の書き下し文として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1 水且に猶ほ忠信を以て身を誠にして之に親しむべきがごとし
2 水且に猶ほ忠信を以て誠身して之を親（おや）とすべきがごとし
3 水すら且つ猶ほ忠信を以て誠身して之を親とすべし
4 水すら且つ猶ほ忠信を以て身を誠にして之に親しむべし
5 水且つ猶ほ忠信誠身を以て之を親とすべきがごとし
6 水且つ猶ほ忠信を以て身を誠にして之に親しむべきがごとし

二 次の文章を読んで、問いに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した部分がある）。

荊昭王之時、有士焉、曰石渚。其為人也、公直無私、王使為政。道有殺人者、石渚追之、則其父也。還車而返、立於廷曰、「殺人者、僕之父也。①以父行法不忍。阿有罪、廃国法、不可。失法伏罪、人臣之義也。」於是伏斧鑕、請死於王。王曰、「追而不及、②豈必伏罪哉。子復事矣。」石渚辞曰、「③不私其親不可謂孝子、事君枉法不可謂忠臣。君令赦之、上之恵也。不敢廃法、臣之行也。」不去斧鑕、歿頭乎王廷。正法枉必死、父犯法而不忍、王赦之而④不肯。石渚之為人臣也、可謂［A］且［B］矣。

（『呂氏春秋』）

注　荊＝春秋時代の楚の国。　斧鑕＝昔の刑罰の用具。
復事＝職務に復帰すること。

問1　傍線①の「以父行法不忍」の書き下し文として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1　父の行くを以て忍びざるを法とす
2　父を以て法を行なふは忍びず
3　父の法を行なふを以て忍びず
4　父を以て法の忍びざるを行なふ
5　父の行なひを以て法は忍びず

問2　傍線②の「豈」、④の「不肯」の読み方を、送りがなも含めて、それぞれひらがなで書け。

②＝

④＝

問3　傍線③の「不私其親不可謂孝子、事君枉法不可謂忠臣」の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1　自分の親からみれば孝子とはいえず、君主に仕えて法をまげるのは忠臣とはいえない
2　親の肩をもたないのは孝子とはいえず、君主のまちがった法をそのまま行なうのは忠臣とはいえない
3　情をかけて親しまないのは孝子とはいえず、君主に仕えて法をまげるのは忠臣とはいえない
4　自分の親からみれば孝子とはいえず、君主のまちがった法をそのまま行なうのは忠臣とはいえない
5　親の肩をもたないのは孝子とはいえず、君主に仕えて法をまげるのは忠臣とはいえない

問4　[A]、[B]に入れるのに、最も適当と思われる語を、本文中からそのまま抜き出して、それぞれ漢字一字で書け。

A＝

B＝

第三講　演習問題 一・二・三

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。

元世祖既立。廉希憲請遣使以息兵講好、命軍北帰、俾(1)恩威並著。世祖善之、而未得(a)其人。王文統素(2)忌郝経才徳。乃遣経行。或謂経曰、(b)盍以疾辞。経曰、自南北構難、江淮遺黎、弱者被(3)俘略、壮者死原野、兵連禍結、斯亦久矣。(c)聖上一視同仁、務通両国之好。(d)雖以微軀踏不測之淵、苟(4)能弭兵靖乱、活百万生霊於鋒鏑之下、吾学為有用矣。遂行。

（『十八史略』）

（注）○元世祖―元の皇帝、フビライ。　○廉希憲―人名。　○講好―和睦する。　○恩威―恩恵と威光。
○王文統―人名。　○郝経―人名。　○南北構難―南の宋（南宋）と北の元とが戦争をする。
○江淮―揚子江と淮河。ここではこれらの川の流域一帯のこと。　○遺黎―敵の側にとり残された人臣。

○俘略―捕らえ略奪すること。 ○微軀―いやしい身。自分をへりくだっていう。 ○弭兵―戦いをやめる。
○生霊―人民。 ○鋒鏑―ほこさきとやじり。ここでは戦争のこと。

問一 波線部(1)～(4)の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(1) 俾
ア しめんことを イ られんことを ウ ざらんことを エ れんことを

(2) 素
ア まさに イ また ウ もとより エ つねに

(3) 被
ア るは イ しめ ウ ずして エ られ

(4) 苟
ア いづくんぞ イ いやしくも ウ しかも エ けだし

問二　傍線部(a)が指しているのはどのような人物か。最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選びなさい。

ア　軍隊を正しく指揮できる人
イ　使者とするのに適切な人
ウ　天子となるのに適切な人
エ　天子に使者を推薦できる人

問三　傍線部(b)の現代語訳として最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選びなさい。

ア　どうしてはやく別れを告げて出発しないのかと
イ　はやく別れを告げて出発しなければならないと
ウ　病気によって辞めるのはどうしてなのかと
エ　どうして病気だと言って辞退しないのかと

問四　傍線部(c)の解釈として最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選びなさい。

ア　孔子の教えはすべての者を平等に愛するというものなので
イ　宋の皇帝は広い心で敵にも平等に思いやりを示すので
ウ　元の世祖は敵味方の区別なくすべてのものをいつくしんで
エ　聖人は一目で平等に思いやりのある者を見いだして

問五 傍線部(d)の読み方として最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選びなさい。

ア もつて びくは ふむと いへども ふそくの ふちなり
イ びくを もつてすと いへども ふんで この ふちを はからず
ウ もつて ふそくの ふちを ふむは びくなりと いへども
エ びくを もつて ふそくの ふちを ふむと いへども

問六 本文の内容に合致するものを、次のア〜キの中から二つ選びなさい。

ア 郝経は、難しい役目を与えて自分を窮地に追い込もうとする王文統の意図を承知の上で、あえて使者の役目を引き受けて出発した。
イ 王文統は、郝経と仲がよかったので、難しい役目だと知りつつも、あえて郝経を使者として遣わすことにした。
ウ 廉希憲は、自分が使者として宋に赴こうとしたが、世祖は使者にふさわしくないと考えて行かせなかった。
エ 王文統は、郝経の才徳を認めていなかったので、使者の役目を辞退するように郝経に言ったが、郝経は自分の学問を役立てるよい機会だと言って出発した。
オ 廉希憲は、宋に使者を派遣して戦争をやめて和睦を結び、恩恵と威光を世に明らかにしようと、世祖に進言した。
カ 世祖は、宋に使者を派遣して戦争をやめて和睦を結び、恩恵と威光を世に明らかにしようという廉希憲の進言を採用しなかった。
キ 王文統は、郝経の才徳を認めていたので、大変危険な使者の役目を辞退するように郝経に勧めた。

二 次の文章を読み、あとの設問に答えよ。（ただし、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）

貞(注1)観初、ⓐ有上書請去佞(注2)臣者。太(注3)宗謂曰、「朕(注4)之所任、皆以為賢。卿(注5)知佞者誰耶。」対曰、ⓑ「ⓒ臣居草沢、不的知佞者。請陛下佯怒以試群臣。ⓓ若能不畏ⓔ雷(注6)霆、直言進諫、則是正人。順情阿旨、則是佞人。」太宗謂封(注7)徳彝曰、「流水清濁、在其源也。君者政源、人(注8)庶ⓕ猶水。君自為詐、欲臣下行直、ⓖ是猶源濁而望水清理不可得。朕常以魏武帝多詭(注9)詐、深ⓗ鄙其為人。如此、豈可堪為教令。」謂上書人ⓘ曰、「朕欲使大信行於天下、不欲以詐道訓俗。卿言ⓙ雖善、朕所不取也。」

（『貞観政要』）

（注）
1　貞観——唐代の年号。
2　佞臣——口先がうまく、こびへつらう家臣。
3　太宗——唐王朝の第二代の君主、李世民。
4　朕——皇帝の自称。
5　卿——第二人称の代名詞。
6　雷霆——かみなり。
7　封徳彝——人名。太宗の家臣。
8　人庶——一般庶民。
9　詭詐——いつわること。あざむくこと。

問一　傍線部ⓐ「有上書請去佞臣者」は、「上書して佞臣を去らんことを請ふ者有り」と読む。返り点をつけよ（送り仮名は不要）。

有　上　書　請　去　佞　臣　者

問二　傍線部ⓑ及び傍線部ⓘの二つの「曰」について、それぞれの主語の組合せとして最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　ⓑ　太宗　　ⓘ　太宗
2　ⓑ　太宗　　ⓘ　上書人
3　ⓑ　上書人　　ⓘ　太宗
4　ⓑ　上書人　　ⓘ　上書人
5　ⓑ　上書人　　ⓘ　封徳彝

問三　傍線部ⓒ「臣居㆓草沢㆒、不㆔的知㆓佞者㆒」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　私めは民間におりますが、誰が佞臣か、はっきりとわかっています。
2　私めは民間におりますので、誰が佞臣か、はっきりとはわかりません。
3　私めは民間におりますが、誰が佞臣か、はっきりわからないわけでもありません。
4　私めは民間におりますので、誰が佞臣か、どうしてはっきりわかるでしょうか。
5　私めは民間におりますが、誰が佞臣か、はっきりさせて御覧に入れましょう。

問四　傍線部ⓓ「若能」、傍線部ⓕ「猶㆑水」及び傍線部ⓙ「雖㆑善」の読み方を、それぞれひらがなのみで記せ。仮名遣いは現代仮名遣いでもよい。

ⓓ＝

ⓕ＝

ⓙ＝

問五　傍線部ⓔ「雷霆」は、何をたとえるか。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　自然の猛威　　2　敵国の襲来　　3　皇帝の激怒
4　非情な判決　　5　民衆の悲鳴

問六　傍線部ⓖ「是猶源濁而望水清理不可得」を書き下し文にすると、どのようになるか。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　是れ猶ほ源濁りて而も水を望まば、清きことの理は得べからざるがごとし。
2　是れ猶ほ源濁りて而も水の清からんことの理を望み、得べからざるがごとし。
3　是れ猶ほ源濁れるがごとく、而も水の清きことは理として得べからざるを望む。
4　是れ猶ほ源濁りて而も水の清からんことを望むがごとく、理として得べからず。
5　是れ猶ほ源のごとく、濁りて而も水の清からんことを望まば、理として得べからず。

問七　傍線部ⓗ「鄙」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　尊敬する　　2　軽蔑する　　3　研究する
4　敬遠する　　5　模倣する

問八　本文の内容と一致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　太宗は意見書を提出した人物の提案に従って群臣を試し、佞臣を発見することができた。
2　太宗は意見書を提出した人物の提案に従ったが、佞臣を発見することはできなかった。
3　太宗は意見書を提出した人物の提案にひどく腹を立て、これを厳しく処罰した。
4　太宗は意見書を提出した人物の提案に従おうとしたが、封徳彝に反対されて思いとどまった。
5　太宗は意見書を提出した人物の提案に従わず、ことさら佞臣を発見しようとはしなかった。

三 次の漢文を読んで、後の設問に答えなさい。ただし、設問との関連で、送り仮名・返り点の一部を省略してあるので注意しなさい。

徽州城外三里、汪朝議家祖父墳庵在焉。紹興間、招僧恵洪住持。僧但飽食安坐、未嘗誦経課念、於供事香火亦極簡略。僅能循循自守、①不為他過、主家上下皆安之。凡歴歳二十、乾道二年病終。汪氏葬之於近山。元有大楮樹、鬱茂扶疏。数月後、頓以枯死、経雨生菌。汪僕牧羊過之、見其肥白光粲、②采而献之主人。用常法煠治、味殊香甘、殆勝於肉。③今夕摘尽、明旦復然、源源不窮、至於三秋。浸浸聞於外、或持銭来、求輟買、悉拒弗与。又畏人盗取、乃設短牆闌護之。隣人嫉憤、夜半踰牆入、将斧其根枿。楮④忽作人言曰、⑤此非爾所得

食、強取之必受殃災。我即⑥昔時庵主也。⑦坐虚受供施、不知慚愧。身歿之後、冥司罰為菌蕈以償。⑧所以肥美者、吾精血所化也。今謫数已足、従此去矣。隣人駭而退、以告汪。⑨汪猶不信、自往験之、不復有［ 1 ］、遂伐以為薪。

（注）○徽州　安徽省の地名。　○朝議　官名。文官の名誉職である朝議大夫の略称。
○墳庵　墓守が住む家。墓所の傍らにある。　○紹興　南宋の年号（一一三一～一一六二）。　○住持　住職。
○誦経課念　経を読み、日課として念仏をとなえる。　○供事香火　線香や灯明をあげる。　○循循　整然としたさま。
○乾道　南宋の年号（一一六五～一一七三）。　○扶疏　木の葉が豊かに茂るさま。　○菌・菌蕈　きのこ。　○僕　召使い。
○肥白光粲　肥えてつややかしているさま。　○煠治　ゆでて調理する。　○源源　物事が続いて絶えないさま。
○三秋　三度目の秋。　○浸浸　しだいに進むさま。　○輟買　まとめて買う。　○闌護　さえぎってまもる。
○根枿　木の根もとから生えているひこばえ。　○冥司　冥界の役人。　○精血　純粋な血。
○謫数　追放の刑罰を課せられた年数。　○出典は、洪邁『夷堅志』。

問1 ――線部①「不レ為二他過一」（返り点のみ施してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　これというよい働きはしなかった
イ　ほかの人を責めるようなことはしなかった
ウ　これというしくじりをすることもなかった
エ　ほかに頼って行くところもなかった

問2 ――線部②「采而献之主人」（送り仮名・返り点は省略してある）の書き下し文として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　采(と)りて献(けん)じて主人(しゅじん)に之(ゆ)く
イ　采(と)りて主人(しゅじん)に之(ゆ)きて献(けん)ず
ウ　采(と)りて之(これ)を献(けん)じて主人(しゅじん)とす
エ　采(と)りて之(これ)を主人(しゅじん)に献(けん)ず

問3 ――線部③「今夕摘尽、明旦復然」のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　夕方に摘みつくしても、翌朝になるとまたもと通りに生えている
イ　夕方に摘みつくしたら、翌朝にはもう何も摘むものはない
ウ　夕方に摘み終わらなかったら、翌朝また続けて摘む
エ　夕方には摘んでもよいが、朝には摘んではいけない

問4　――線部④「忽」のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　うわのそらで　　イ　こらえきれず
ウ　いきなり　　エ　うっかりと

問5　――線部⑤「此非爾所得食」（「この茸（きのこ）はおまえごときが食べるべきものではない」という意）に施す返り点として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　此 非レ爾 所レ得レ食
イ　此 非三爾二所 得 食一
ウ　此 非二爾 所一レ得レ食
エ　此 非二爾 所 得一レ食

問6　――線部⑥「昔時ノ庵主」の指すものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　汪朝議の家の祖父
イ　汪朝議
ウ　汪家の召使い
エ　僧恵洪

問7 ――線部⑦「坐虚受供施」（「坐して虚しく供施を受けて」と訓読する）が踏まえる内容として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア 汪家の墓守としてはあまり役に立たないながらも、汪家の人々に愛されたこと。
イ 墓守として長年雇ってもらった汪家で病没し、死後も手厚く葬ってもらったこと。
ウ ろくに墓守としての務めを果たしもせずに、汪家に雇い続けてもらったこと。
エ 内心不満でありながら、二十年以上も汪家の墓守を務めなくてはならなかったこと。

問8 ――線部⑧「所以」（この語を含む句の訓点は省略してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア 理由　イ 結果　ウ 説明　エ 目的

問9 ――線部⑨「汪猶不㆑信」（返り点のみ施してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア 汪朝議は隣人の話を信じたくなかった
イ 汪朝議は隣人の話を信じないふりをした
ウ 汪朝議は隣人の話を聞いてもまだ信じなかった
エ 汪朝議は隣人の話を信じていないようだった

問10　［1］に入れるものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　羊　　イ　菌　　ウ　楮　　エ　墳庵

問11　本文の内容と合致するものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　汪家の人々は、病死した僧を寺の許しもなく楮の大木の下に埋葬したことが冥界の役人の怒りを買い、裁きを受ける結果となった。

イ　枯れた楮の大木に生えた茸は、肉の味にも勝るうまさで、そのうえ不老不死の効験があると国中の評判になり、汪家では希望者に快く分け与えた。

ウ　汪家の隣家の人は、人間の言葉で語り始めた楮の大木に驚き、こんな不気味な木をそのままにしては危険だと考え、伐採することを提案した。

エ　枯れた楮の大木に生える茸は、汪家の人々の口に入るためにだけ生えていたのであって、他の家の者が取ったら災いがふりかかるというものであった。

第四講 演習問題 一・二・三

一 次の文章を読んで、問いに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した部分がある）。

武進諸生楊某、館於某氏。其人富而豪侈。毎夜飲必三鼓。一日酔帰、見館中灯火甚盛。従窓隙窃窺之。見案辺二燭卓立甚巨。有緋衣人、拠案観書。意其楊也。明日詢之。①楊対以実早寝未嘗夜読。然心怪之。至夜、仮寐以②伺。近三鼓、忽有大声伝呼。排戸而入。随有二巨燭出地上。已而紅焔満室。僕隷雑遝、擁一緋衣人至。拠案而坐、取案上書冊翻之。楊懼而叫呼。緋衣人若不聞者。将五鼓、緋衣者徐起、径趨楊臥処。衆皆従之。忽挙床四脚盤旋室中、③復擲之空中者数四。天

将ニレ曙ケント、又聞ク二伝呼ノ声ヲ一。④寂無所見矣。久シクシテ之楊始メテ甦よみがへリ、起チテ視レバ二門戸ヲ一、扃けい鐍けつ如シレ⑤故ノ。問ヘドモ二院中ノ人ニ一、毫モ無シレ所レ聞ク也。因リテ急ギテ謝シテ二主人ニ一帰ル。帰ルコト数日ニシテ火大イニ作おこリ、所レ居ル皆燼やケリ。始メテ悟ル二所レ見ル乃チ火神ナルヲ一耳。

（『池北偶談』）

注　武進＝地名。　諸生＝科挙（官吏登用制度）の受験生。　三鼓＝午後十一時から午前一時の間。
案＝机。　仮寐＝寝たふりをする。　僕隷＝しもべ。　雑遝＝多くのものが混み合うこと。
五鼓＝午前三時から五時の間。　盤旋＝ぐるぐる回す。　数四＝三、四回。　扃鐍＝戸の掛け金。

問1　傍線①の「楊対以実早寝未嘗夜読」の書き下し文として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1　楊対ふるに実に早く寝ぬるを以てし、未だ夜に読むことを嘗こころみず。
2　楊対ふるに実に早きを以てし、寝ねて未だ嘗て夜に読まず。
3　楊対ふるに実に早く寝ね、未だ嘗て夜に読まざるを以てす。
4　楊対へて以て実に早く寝ね、未だ夜に読むことを嘗こころみず。
5　楊対へて以て実に早く寝ね、未だ嘗て夜に読まず。

問2 傍線②に「伺」とあるが、どのような光景を目撃したのか。その説明として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1 楊の大きな掛け声に応じて緋衣の人を中心とした一群が入って来て部屋に火を放ち、楊が机上の書物を閉じたかと思うと、緋衣の人は突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

2 楊の大きな掛け声に応じて緋衣の人を中心とした一群が入って来て部屋に火を放った時、緋衣の人は机に向かって書物を読んでいたが、突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

3 大きな掛け声とともに緋衣の人を中心とした一群が入って来て、赤い炎が部屋中に広がり、楊が机に向かって読書を続けていると、緋衣の人は突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

4 大きな掛け声とともに緋衣の人を中心とした一群が入って来て、赤い炎が部屋中に広がり、緋衣の人は机に向かって書物を読んでいたが、突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

5 大きな掛け声とともに緋衣の人を中心とした一群が入って来て、赤い炎が部屋中に広がり、楊が机上の書物を閉じて様子を見ていると、緋衣の人は突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

問3 傍線③の「復」、⑤の「故」の読み方を、③については送りがなも含めて、それぞれひらがなで書け。

③＝

⑤＝

問4　傍線④の「寂無所見矣」の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1　しんと静まりかえっていて誰の姿も見えなかった
2　さびしい夜だったのに家の誰にも会いたくなかった
3　しんと静まりかえっていて誰も気付くものはなかった
4　とてもさびしい夜なのに誰もやって来てくれなかった
5　とてもさびしい夜だったので人影ひとつ見えなかった

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

呉人有焼桐以爨*者。邕*聞火烈之声、知其良木、因請而裁為琴。果有美音、而其尾猶焦。故時人名曰焦尾琴焉。初、邕在陳留*也、①其隣人有以酒食召邕者。比往而酒以酣焉。客有弾琴於屏*。邕至門試潜聴之曰、憘、以楽召我、而有殺心、何也。遂反。将命*者告主人曰、蔡君向来、至門而去。邕素（A）為邦郷所宗、②主人遽自追而問其故。邕具（B）以告、③莫不憮然。弾琴者曰、我向鼓弦、見蟷*螂方向鳴蝉。蝉④将去而未飛、蟷螂為之一前一却。吾心聳*然、惟（C）恐蟷螂之失*之也。此豈為殺心而形於声者乎。邕莞*然笑曰、此*足以当之矣。

（『後漢書』蔡邕列伝より）

注
＊爨　飯を炊く。
＊邕　蔡邕。後漢末の儒学者。
＊陳留　地名。現在の河南省陳留県。
＊屏　ついたて。
＊将命者　取り次ぎの者。
＊螳蜋　かまきり。
＊聳然　恐れるさま。
＊失之　蟬を殺そうとすること。
＊莞然　にっこりと笑うさま。
＊此足以当之矣　これですっかり謎が解けた。

問一　波線部Ａ「素」Ｂ「具」Ｃ「惟」の読み方を、送り仮名も含めてひらがなで記せ。

Ａ＝

Ｂ＝

Ｃ＝

問二　傍線部①「其隣人有以酒食召邕者」の書き下し文として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　其れ隣人有り、酒食は邕を召す者を以てす。
イ　其の隣に人有り、酒食を以て邕を召す者なり。
ウ　其の隣人に酒食を以て邕を召す者有り。
エ　其れ隣に人有り、以て酒食は邕を召す者なり。
オ　其の隣人は以て酒食を有して邕を召す者ならん。

問三　傍線部②「主人遽自追而問其故」とあるが、主人がそのような行動をとった理由として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　琴の名手である蔡邕にも自慢の琴を弾いてもらいたいから。
イ　蔡邕は平素から世の人々に尊敬されている人物だから。
ウ　取り次ぎの者が蔡邕をぞんざいに扱ったことを知ったから。
エ　古くからの友人である蔡邕に帰られては体面にかかわるから。
オ　儒学者の蔡邕の推薦によって任官したいと望んでいたから。

問四　傍線部③「莫不憮然」とあるが、その解釈として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　一度はいぶかしいことだと思った。
イ　ぼんやりしていぶかしく思わなかった。
ウ　いぶかしくないなどと思ってはならない。
エ　無礼にもいぶかしいことだと思った。
オ　いぶかしく思わない者はいなかった。

問五　傍線部④「将去而未飛」をひらがなのみの書き下し文にせよ。

問六　前の文章から蔡邕の持つどのような才能が読み取れるか。次の形式に従って（［　　］部分を）二十字以内にまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

蔡邕は、［　　　　　　　　］才能を持っていた。

三 次の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。

人ハ無シ二毛羽一、不レ衣(き)レバ則チ不レ(1)犯サレ寒ヲ。上ハ不レ属セレ天ニ、而シテ(2)下ハ不レ著カレ地ニ、以テ二腸胃一ヲ為ス二根本一ト。不レバ食ラハ則チ(3)不レ能レ活クル、是ヲ以テ不レ免レ二於欲スルレ利ヲ之心ヨリ一。欲スルレ利ヲ之心、不ルハレ除カレ、其ノ身之憂也。故ニ聖人ハ衣ハ足リ二以テ犯スニ一レ寒ヲ、食ハ足レバ二以テ充タスニ一レ虚ヲ、則チ不レ憂ヘ矣。(4)衆人ハ則チ不レ然ラ。大ハ為リ二諸侯一ト、小ハ余スモ二千金之資一ヲ、其ノ欲スルレ得ルヲ之憂不ルレ除カレ也。胥(しょ)靡(び)(注1)モ有リレ免ルルコト、死罪モ時ニ活ク。今不ルレ知ラレ足ルヲ者之憂ハ、終身不レ□。故ニ曰ハク、(5)禍莫大於不知足。

（『韓非子』による）

（注）1 胥靡――徒刑者。囚人。

問

(A) ――線部(1)の「犯」の解釈として最も適当なもの一つを、次記各項の中から選べ。

1 苦悶　2 甘受　3 変容
4 容認　5 克服

(B) ――線部(2)の解釈として最も適当なもの一つを、次記各項の中から選べ。

1 未熟でまだ地に足がついておらず
2 地下に潜って住むことはできず
3 身分の低い者は豊かな生活ができず
4 力のない者は天下を支配できず
5 植物のように地に根をおろしておらず

(C) ――線部(3)の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(D)　——線部(4)について。次記各項のうち、その内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　多くの人々は憂いから自由になることはない。
ロ　多くの人々は成功して地位を得たとしても満足できない。
ハ　多くの人々は毛や羽が無くても気候に順応できる。
ニ　多くの人々は罪を犯しても許されることがある。
ホ　多くの人々は空腹が満たされれば幸福を感じる。
へ　多くの人々は財産を得ても満足できない。

イ＝　　ロ＝　　ハ＝
ニ＝　　ホ＝　　へ＝

(E)　空欄□にはどのような語を補ったらよいか。次記各項の中から最も適当なもの一つを選べ。

1　笑　　2　施　　3　解
4　始　　5　遊

（F） ――線部(5)の書き下しと解釈の組合せとして最も適当なもの一つを、次記各項の中から選べ。

1 ［書き下し］ 禍は足るを知らざるより大なるは莫し。
［解釈］ 満足することを知らないことよりも大きい災禍はない。

2 ［書き下し］ 禍は足るを知らざることに於いて大なるは莫し。
［解釈］ 災禍に満ちた世の中のことは、考えないのが一番よい。

3 ［書き下し］ 禍の大なること莫ければ足るを知らず。
［解釈］ 大きな災禍を経験しなければ、満足は得られない。

4 ［書き下し］ 禍大なれば足るを知らざる莫し。
［解釈］ 災禍が大きければ、かえって真の満足が得られる。

5 ［書き下し］ 禍莫きは足るを知らざるより大なり。
［解釈］ いま災禍が起こらないのは、将来満足を得るよりも大事である。

第五講　演習問題 一・二

一　次の文章を読んで、問いに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した部分がある）。

晏子聘於呉。呉王曰、「敢問、長保威強勿失之道若何。」晏子①対曰、「 A 民而 B 身、 A 施而 B 誅。強不暴弱、貴不凌賤、富不傲貧。百姓並進、有司不侵、民和政平。②不以威強退人之君、不以衆強兼人之地。其用法為時禁暴、故世不逆其志。其用兵為衆屏患、故民不疾其労。此長保威強勿失之道也。失此者危矣。」呉王忿然作色不説。晏子曰、「寡君之事畢矣。嬰無斧鑕之罪。③請辞而行。」④遂不復見。

（『晏子春秋』）

注 晏子＝晏嬰。春秋時代の斉の国の宰相。 聘＝使者として訪問する。 呉＝国名。
威強＝強大な勢力。 屛＝取り除く。 忿然＝いきどおるさま。
寡君之事＝我が主君から賜わった務め。 斧鑕＝昔の刑罰の用具。

問1 傍線①の「対」、④の「遂」の読み方を、送りがなも含めて、それぞれひらがなで書け。

①＝

④＝

問2 [A]、[B]に入れる語の組み合わせとして、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1 A 強 B 弱
2 A 弱 B 強
3 A 先 B 後
4 A 後 B 先
5 A 高 B 低
6 A 低 B 高
7 A 是 B 非
8 A 非 B 是

問3 傍線②の「不以威強退人之君、不以衆強兼人之地」の書き下し文として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1 威強を以てせずして人の君を退け、衆強を以てせずして人の地を兼ぬ
2 威強を以て人を退くるの君ならず、衆強を以て人を兼ぬるの地ならず
3 威強を以て退けざるは人の君にして、衆強を以て兼ねざるは人の地なり
4 威強の退くるを以て人の君ならず、衆強の兼ぬるを以て人の地ならず
5 威強を以て人の君を退けず、衆強を以て人の地を兼ねず

問4 傍線③に「請辞而行」とあるが、その理由として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1 強大な勢力を長く保って失うことがないようにする道がないことを知って、呉王が憤慨したから。
2 強大な勢力を長く保って失うことがないようにする道が容易なことを、呉王がやっと悟ったから。
3 強大な勢力を長く保って失うことがないようにする道を、呉王が都合のいいように解釈したから。
4 強大な勢力を長く保って失うことがないようにする道を説いたのに、呉王が納得しなかったから。
5 強大な勢力を長く保って失うことがないようにする道が容易でないことを、呉王が納得したから。

二　「班婕妤が団雪の扇」は、班婕妤の雪のように白く丸い扇のことで、前漢の成帝のとき、宮女の班婕妤が帝の寵愛を失った故事を踏まえている。次に、これと同じ故事を踏まえた李白の詩「長信宮」と、それに対する『唐詩解』の解説を読んで、あとの問に答えよ（なお、設問の関係上、返り点および送り仮名を省略した箇所がある）。

月ハ皎タリ昭陽殿

霜ハ清シ長信宮

天（注1）行乗ジ二玉（注2）（ぎょく）輦（れん）ニ一

飛（注3）燕与レ君同ジクス

更ニ有リ二歓娯ノ処一

1承レ恩楽シミ未レ［A］

誰カ憐マン団扇ノ妾

独リ坐シテ怨ム二秋風ヲ一

此レ為リ下班姫失ヒテレ寵ヲ而羨ム二飛燕ヲ一之詞上。月ノ皎タルハ二昭陽ニ一彼之佳景也。霜ノ清キハ二長信ニ一、己之落寞也。天子乗ズルヤレ輦ニ、昔欲シ二与レ我共ニ載ラント一、今 **B** 与二飛燕一同レ之。且ツ歓娯非ズレ一ニ、承レ恩侍リレ寝ニ、其ノ楽シムコト無シレ限リ。誰カ憐マン三団扇之妾、独リ坐シテ而怨ムルヲ二此ノ秋風ヲ一乎。蓋シ太(注4)白召サレテ見ユル二金(注5)(きん)鑾(らん)ニ一之時、2<u>帝親為之調羹、後為妃(注6)子所譖</u>、寵遇日ニ衰ヘ、故ニ托シテレ此ニレ以テ自ラ嘆ク。

（注1）天行…天子の行幸。　（注2）玉輦…天子の御輿。　（注3）飛燕…宮女の趙飛燕のこと。

（注4）太白…李白の字。帝に召されて翰林院に出仕した。　（注5）金鑾…宮殿の一、翰林院のこと。　（注6）妃子…楊貴妃。

（Ⅰ）傍線部1「承レ恩」の主語は誰か。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　班姫　　イ　飛燕　　ウ　帝　　エ　太白　　オ　妃子

（Ⅱ）空欄Ａに入る最も適切な語を、次の中から一つ選べ。

ア　極　　イ　失　　ウ　窮　　エ　隔　　オ　絶

（Ⅲ）空欄Ｂに入る最も適切な語を、次の中から一つ選べ。

ア　安　　イ　況　　ウ　乃　　エ　奚　　オ　猶

（Ⅳ）傍線部２「帝親為之調羹、後為妃子所譖」の返り点の付け方とその現代語訳の組み合わせとして、最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア　帝親為レ之調レ羹、後下為二妃子一所上レ譖
「帝はみずから李白に温かなスープを用意し、楊貴妃の非礼な振る舞いを不問に付した」

イ　帝親為レ之調レ羹、後為二妃子一所レ譖
「帝は親切にも李白に温かなスープを調理したが、あとになって李白は楊貴妃に非礼をとがめられた」

ウ　帝親為二之調一レ羹、後為二妃子一所レ譖
「帝はみずからこのように温かなスープを用意したが、その後、楊貴妃のために非難を受け入れた」

エ　帝親為レ之調レ羹、後為二妃子所一レ譖
「帝はみずから李白に温かなスープを調理したが、その後、李白は楊貴妃に誹謗中傷された」

オ　帝親為二之調一レ羹、後下為二妃子一所上レ譖
「帝は親切にもこのように温かなスープを用意し、楊貴妃の告げ口をあと回しにした」

（V） この詩の解釈として、『唐詩解』の趣旨を踏まえたうえで、最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア 班婕妤は、かつて被った帝の恩寵が今や趙飛燕のものとなり、まるで秋風に打ち捨てられた扇のように寄る辺なく年老いていく身の上を怨んだ。李白は、その班婕妤の哀れな姿におのれの不遇を重ね同情している。

イ 班婕妤は、昭陽殿の美しい景色がついに寂れてしまったように、帝の寵愛もいつかは薄らぎ不遇の身となることを憂えた。李白は、その班婕妤の憂愁に満ちた姿を秋風に破れた扇に喩え、人の一生のはかなさを悲しんでいる。

ウ 班婕妤は、帝の恩寵が薄れるにしたがって趙飛燕の美貌が羨ましくなり、自分の容姿を美しい扇に喩えて帝の側に置くよう切望した。李白は、その班婕妤の振る舞いと楊貴妃の帝に対する身勝手な行動が同じであると批判している。

エ 班婕妤は、帝と共に楽しく過ごした往時を回想し今や寵愛を一身に集める趙飛燕を羨望したが、帝への愛情は扇のように欠けるところがなかった。李白は、その班婕妤の一途な思いに感嘆し、帝への忠誠を新たにしている。

オ 班婕妤は、帝と分かちあった扇を趙飛燕に奪われたため趙飛燕を怨めしく思っていたが、ついに帝の寵愛さえも失った。李白は、その班婕妤の哀れな姿を秋の冷たい風に喩え、おのれには為す術がないことを嘆いている。

模範解答

【第一講】

〔模範解答〕

一

問1　③　　問2　②　　問3　自分が以前通った道を覚えているという知恵

問4　④　　問5　①　　問6　不レ難レ師二於老馬与一レ蟻。　　問7　⑤

二

問一　C　　問二　保中　　問三　流　　問四　なんぞや　　問五　D

三

A　1　　B　1　　C　5　　D　のみ　　E　4　　F　4

〔現代語訳〕

一

管仲と隰朋は、斉の桓公に従って孤竹の国を伐った。春に出陣し冬に帰った。（帰途で）迷って道がわからなくなった。管仲が言うには「老馬の知恵を利用できる」と。そこで老馬を放ち、それについて行き、その結果正しい道に戻ることができた。山中を行くと水がなくなった。隰朋が言うには「蟻は冬には山の南側にいて、夏には山の北側にいる。蟻塚が高さ一寸ならば、その下に水がある」と。そこで地面を掘り、その結果水を手に入れることができた。管仲の賢明さと隰朋の知恵とをもってしても、自分が知らないことに出くわすと、老馬と蟻を師とすることをためらわない。（それなのに）今の人は、自分の愚かな考えを用いるばかりで聖人の知恵を師とすることを知らない。なんとも間違えているではないか。

二

私は聞いたことがある、「木が生長することを求める者は、必ずその根元をしっかりと固め、水の流れが遠くまで届くことを願う者は、必ず水源を深く掘り、国家が安定であることを考える者は、必ず自身の徳義を高めるのだ」と。水源が深くないのに流れが遠くまで届くことを望み、根元がしっかりしていないのに木が生長することを求め、徳が厚くないのに国家が治まることを考えるのは、とてもおろかな私であっても、それが不可能だとわかる。まして賢者の場合はなおさらである。君主は帝位にあり、天下に君臨し、君主として徳義を高め、いつまでも終わりのない平安を維持しようとするものだ。（それなのに）安定の状況でも危険な時のことを考えたり、贅沢を戒めて倹約を旨とすることを考えたりせず、自身の徳は厚くなく、心は欲に勝てないのは、これは根を切ってそして木が茂ることを求め、水源をふさいでおきながら流れが遠くまで届くことを願うものである。さまざまな君主が、大いなる天命によって帝位に就き、深く心配して道徳的に優れていて、（しかし）帝位に就いた後には徳が衰えてしまわない者はいない。上手に始める者はとても多いが、上手に最後までやり通すことができる者は思うに少ない。なんと天下を手に入れることは簡単で天下を治め続けることは難しいのではないか。昔、天下を手に入れて（徳が）余るほどあり、現在は天下を治め続けて（徳が）足りなくなるのは、どうしてか。そもそも深く心配している時には、必ず誠意を尽くして下の者に対応するが、現に目的を達成すると心の赴くままに行動して他者に傲慢になる。誠意を尽くせば呉越のような敵対関係にある者も一致団結し、他者に傲慢になると肉親も通行人（のように他人）となる。

三

私のいとこの李善勝は、かつて数人の同世代の者と硫化水銀を練って不死になれるという丹薬を作った。一年余りを経て、硫化水銀を洗って再び鼎に入れたところ、誤って一塊を取り残してしまった。その仲間が丸めてそれを服用し、その結果昏睡状態に陥り、一晩で死んでしまった。硫化水銀はこの上ない良薬であって、生まれたばかりの赤ん坊も服用できるが、火力で変化させることによって、その結果人を殺すことができる。変化に応じて（性質が）相対的に変わることから言えば、変化して大毒となることができるのだから、どうして変化して大善となることができないか、いや、できる。変化して人を殺すことができるのだから、人を生かせる道理もあるはずだ。ただその方法がまだ見つからないだけだ。このことによって知るのは、

仙人になる処方は、無いとは言えない、だけどまた注意しないわけにはいかないのである。

【第二講】

〔模範解答〕

一

問1　3

問2　②　ゆゑん　⑤　いはんや

問3　忠信

問4　4

二

問1　2

問2　②　あに　④　がへんぜず

問3　5

問4　A　忠　B　孝〔順不同〕

〔現代語訳〕

一

孔子が衛から魯に帰った時に、乗物を河に架かる橋に停めて見回した。滝が三十仞、渦巻く流れが九十里続いている。魚もすっぽんも泳ぐことができず、すっぽんもワニもいることはできない。一人の男がいて、ちょうど今そこを渡ろうとしている。孔子は人にその男を止めさせて言うには、「この滝は三十仞、渦巻く流れが九十里である。魚もすっぽんも泳ぐことができず、すっぽんやワニもいることはできない。思うに渡ることはできないのではないだろうか」と。男は孔子から言われたことを全く気にかけず、そのまま渡って（河から）出てきた。孔子はこの男に尋ねて言うには、「巧みだなあ。仙術があるのですか。（この河に）入って出てくることができる理由は何ですか」と。男が答えて言うには、「最初に私が入った時、まず誠実で信実な状態に置いた。私が出る時にも、また誠実で信実な状態に従った。誠実で信実な状態で我が身を河の流れに置いて、私は決して自分勝手な気持ちは抱かなかった。入って再び出ることができた理由は、このためだ」と。孔子が弟子たちに言うには、「お前たち、これを覚えておきなさい。水でさえ誠実で信実な状態に置くことで我が身を誠の存在にして水と親しめるのである、まして、人間ならなおさら（誠実で信実な状態に置くことで当然相手と親しめるの）だ」と。

二

荊の昭王の時代に、石渚という官吏がいた。彼の人格は、公正実直で私欲がなく、王は（彼を）国政に関与させた。道で人を殺した者がいて、石渚が犯人を追いかけると、自分の父親であった。車を反転させて帰り、宮中で言うことには、「人を殺した者は私の父でした。父に法を執行することは耐えられません。（しかし）犯罪者に味方して、国法をまげることは、できません。法を乱して罪に服するのは、臣下としての道義です」と。そこで刑罰の用具の上に伏して、王に死を賜るよう願った。王が言うことには、「追いかけたが捕まえられなかったのなら、どうして罪に服する必要があろうか、いや、その必要はない。あなたは職務に復帰しなさい」と。石渚が辞退して言うことには、「親の肩をもたないのは孝子とはいえず、君主に仕えて法をまげるのは忠臣とはいえない。君主が私をお許しになるのは、お上のお慈悲です。（しかし）決して法をないがしろにしないのが、私の行いです」と。刑罰の用具から去らず、宮中で首をはねた。法がまがったのを正すためには刑死することが必要で、父が法を犯して（罪に服することに）耐えられず、王がこれを許したが承知しなかった。石渚は臣下として、忠臣かつ孝子と言える。

【第三講】

〈模範解答〉

一

問一　(1) ア　(2) ウ　(3) エ　(4) イ　問二　イ　問三　エ
問四　ウ　問五　エ　問六　ア・オ

二

問一　有下上書請レ去二佞臣一者上　問二　3　問三　2
問四　ⓓ もしよく　ⓕ なお〔ほ〕みず〔づ〕のごとし　ⓙ ぜんなり〔よし〕といえ〔へ〕ども
問五　3　問六　4　問七　2　問八　5

三

問1　ウ　問2　エ　問3　ア　問4　ウ　問5　ウ　問6　エ
問7　ウ　問8　ア　問9　ウ　問10　イ　問11　エ

〈現代語訳〉

一

元の世祖が君主の位についていた。廉希憲は（宋に）使者を遣わして戦争を止め和睦し、自軍に命じて北へ引き上げさせて、恩恵と威光の二つを世に明らかにさせたいと願い出た。世祖はこれをよしとしたが、まだ使者とするのに適切な人を得られないでいた。王文統は以前から郝経の才能と人徳をねたんでいた。そこで郝経を（宋へ）遣わして行かそうとした。ある人が郝

経に言うには、「どうして病気だと言って辞退しないのか」と。郝経が言うには、「南の宋と北の元が戦争してから、揚子江と淮河一帯に取り残された人民は、弱い者は捕らえ略奪され、強い者は原野で死に、戦乱が続いてわざわいが長くなった。主上〔＝元の世祖〕は敵味方の区別なくすべてのものをいつくしんで、両国間の友好を進めようと努めている。（私は）このいやしい身で深さの分からない淵〔＝敵地〕を踏むけれども、もし戦いをやめ乱を平定させ、百万人の人民を戦争の中から救うことができたならば、私が学んだことはむだではなかったことになる」と。とうとう（宋に）行く。

二

貞観の始めごろ、（太宗に）意見書を出して佞臣〔＝口先がうまく、こびへつらう家臣〕を追放することを願う者がいた。太宗が言うことには、「私が任命した臣下たちは、みなすぐれていると思っている。あなたは佞臣が誰であるかわかっているのか」と。（上書人が）お答えして言うには、「私めは民間におりますので、誰が佞臣か、はっきりとはわかりません。どうか陛下、いつわりで怒って、そして群臣を試してください。もし皇帝の激怒をおそれず、はっきりと（陛下を）諫めることができれば、それは正直な臣下です。陛下のお気持ちに合わせてお言葉におもねれば、それは佞臣です」と。太宗が封徳彝に言うことには、「流れていく水が澄むか濁るかは、水源にかかっているのである。主君は政治における水源で、一般庶民はまるで水にたとえられる。主君が自らいつわりを言って、臣下が正直であることを望むのは、ちょうど水源が濁っているのに水が澄むことを望むようなもので、道理として成り立たない。私は常に魏の武帝がいつわりが多いので、深く彼の人品を軽蔑している。このようにしたら、どうして民の強化などできようか、いや、できない」と。（太宗が）上書人に言うことには、「私は信頼が天下において実践されることを望んでいて、いつわりによって民を導こうとは望んでいない。あなたの意見は正しいが、私が採用する方法ではない」と。

三

徽州の街から三里くらいのところに、汪朝議の祖父の墓守が住む家があった。紹興年間、僧の恵洪を住職として招いた。僧〔＝恵洪〕はただお腹一杯食べて何もせず、今まで一度も経を読み、日課として念仏をとなえたことがなく、線香や灯明をあ

げることもきわめて簡略であった。ただ整然と自分の行動に気をつけて、これというしくじりをすることもなく、雇い主の一族のだれもが恵洪に不満を持たなかった。およそ二十年が経過し、乾道二年に（恵洪は）病気で亡くなった。汪氏は恵洪を近くの山に埋葬した。もともと大きな楮の木があり、木の葉がこんもりと豊かに茂っていた。数か月後、急に枯れ、雨が降るときのこが生えてきた。汪朝議の召使いが羊を放牧していてここに立ち寄ると、きのこが肥えてつやつやしているのを見つけ、採ってこれを主人に献上した。通常の方法を用いてゆでて調理すると、味は格別に香りがあって美味しく、肉にも勝るほどであった。夕方に摘みつくしても、翌朝になるとまたもと通りに生えている、このことが続いて絶えず、三度目の秋になった。（このことは）しだいに世間に広まって、ある人はお金を持ってやって来て、（きのこを）まとめて買おうと求めたが、（汪朝議は）すべて拒否して分け与えなかった。また人が盗み取るのを心配し、そこで垣根で囲ってきのこをさえぎってまもった。隣人は嫉妬して憤慨し、夜中に垣根を乗り越えて入り、その木の根もとから生えているひこばえを切ろうとした。楮がいきなり人間の言葉を話して言うことには、「このきのこはおまえごときが食べるべきものではない、無理にこれを採ると必ず災いを受けるであろう。私は以前に庵の主人であった者〔＝僧恵洪〕である。（私は）ろくに墓守としての務めを果たしもせずに、汪家に雇い続けてもらいながら、（そのことを）恥じることがなかった。死んだ後、冥界の役人が罰として（私に）きのことならせて償わせている。（きのこが）肥えてつやつやしている理由は、私の純粋な血が変化したものだからだ。今、追放の刑罰を課せられた年数が満了し、ここから去るつもりだ」と。隣人が驚いて家に戻り、汪朝議に告げた。汪朝議は隣人の話を聞いてもまだ信じず、自分自身で行って確かめようとしたが、もう二度ときのこは生えず、とうとう（楮の大木を）切り倒して薪にしてしまった。

【第四講】

〈模範解答〉

一

問1　3　問2　4　問3　③　また　⑤　もと　問4　1

二

問一　A　もとより　B　つぶさに　C　ただ　問二　ウ

問三　イ　問四　オ　問五　まさにさらんとして〔まさにさらんとすれども〕いまだとばず

問六　音を聞いただけでその状態や心が読み取れる（二十字）

三

A　5　B　5　C　あたわず

D　イ　1　ロ　1　ハ　2　ニ　2　ホ　2　ヘ　1

E　3　F　1

〈現代語訳〉

一

武進の科挙の受験生の楊は、ある人の屋敷に宿泊していた。その人は金持ちで大変贅沢であった。毎晩いつも飲むと、午後十一時から午前一時くらいになっていた。ある日（主人が）酔って帰ると、屋敷の中の灯火がとても明るいのを見た。窓のすき間からこっそりと部屋の中を覗いた。机の側にとても大きな二本のロウソクが立っているのが見えた。赤い服の人が居て、

机に寄りかかって書物を読んでいた。（それを）楊であろうと思った。翌日（主人は）昨晩のことを尋ねた。楊は「本当に早く寝ていて、今まで一度も夜中に書物を読んだことはない」と答えた。しかし心の中でこの事を不審に思った。夜になって、（楊は）寝たふりをしてこっそり見ていた。午後十一時から午前一時くらいになると、突然大きな声で触れ回る者がいる。部屋の戸を押し開いて入ってきた。二本の大きなロウソクが床から出てきた。そして真っ赤な炎が部屋に満ちた。しもべが多くいて、一人の赤い服の人を警護して（部屋に）やって来た。（赤い服の人は）机に寄りかかって座り、机の上の書物を手に取って読み始めた。楊は怖くなって大声で叫んだ。赤い服の人は聞こえない者のようだ。午前三時から五時の間になろうとする頃、赤い服の人はゆっくりと立ち、すぐに楊が寝ている所に走ってきた。召使いも皆その後に付き従った。突然、寝台の四つの脚を持ち上げて部屋の中でぐるぐる回し、再び寝台を空中に投げ上げること三、四回。夜が今にも明けようとすると、また触れ回る声が聞こえた。（すると）しんと静まりかえっていて誰の姿も見えなかった。しばらくして楊は正気を取り戻し、立って部屋の戸を見ると、戸の掛け金は元のままだった。屋敷に住む人に聞いたが、少しの物音も聞こえなかった（という）のである。よって急いで主人に挨拶をして去った。立ち去ってから数日後に大きな火事がおこり、（楊が）居た部屋は全部焼けた。そこで初めて見たもの〔＝赤い服の人〕が「火の神様」だと楊は悟ったのだ。

二

呉の人に桐の木を焼いて飯を炊く者がいた。蔡邕は火がはじける音を聞いて、それが良木であることを知り、そこで（その木を）もらって切って琴にした。やはり美しい音を立てたが、その端の部分はなおも焦げていた。よって当時の人は焦尾琴と名付けた。かつて、邕が陳留にいた時、その隣人に酒食で邕を招く者がいた。行く時には酒宴はすでに盛り上がっていた。客に琴をついたての陰で弾く者がいた。邕は門のところに至ると試みにこっそりこれを聴いて言うには、「ああ、楽しいことで私を招いたのに、それなのに殺伐とした心があるのはどうしてか」と。そのまま帰った。取り次ぎの者が主人に告げて言うには、「蔡邕様が先ほど来ましたが、門のところまで来て帰りました」と。邕は平素から世の人々に尊敬されているので、主人は慌てて自分で後を追ってその理由を問うた。邕は詳しく告げたが、いぶかしく思わない者はいなかった。琴を弾いた者が言うには、「私は先ほど弦を弾いている時、かまきりがちょうど鳴いている蟬に向かっていくのを見ました。蟬は今にも飛び去

ろうとしてまだ飛ばず、かまきりはそのため進んだり退いたりしていました。私の心が恐れるさまであったのは、ただかまきりが蟬を殺そうとすることを恐れたからです。これがひょっとして殺伐とした心を生じさせて音に表れたのかもしれません」と。邕がにっこり笑って言うには、「これですっかり謎が解けた」と。

三

人には毛も羽もない。（服を）着なければ寒さを克服できない。上は天につながっておらず、下は（植物のように）地に根をおろしておらず、胃腸を根源としている。食べなければ生きることができず、こういうわけで利益を欲する心から逃げられない。利益を欲する心が除かれないのは、その身の悩みである。だから聖人は着るものは寒さを克服するのに十分で、食事は空腹を満たすのに十分であれば、悩まない。多くの人々はそうではない。大は諸侯となろうとし、小は千金の財を残そうとして、それを得ようと欲する悩みは（いつまでも）除かれないのである。徒刑者も許されることがあり、死罪も時には助かる。今や満足することを知らないものの悩みは、一生解けない。だから言うことには、「満足することを知らないことよりも大きい災禍はない」と。

【第五講】

〔模範解答〕

一

問1　①　こたへて　④　つひに

問2　3

問3　5

問4　4

二

Ⅰ　イ　Ⅱ　ウ　Ⅲ　ウ　Ⅳ　エ　Ⅴ　ア

〔現代語訳〕

一

（斉の国の宰相の）晏嬰が呉の国に使者として訪問した。呉王が言うには、「強いて問うが、長く強大な勢力を保って失うことがないようにする方法はどのようなものか」と。晏嬰がお答えして言うには、「人民を第一に考えて自身を後回しにし、恩恵を与えることを第一に考えて罪をとがめることを後回しにします。強者は弱者を虐げず、身分の高い者は身分の低い者を馬鹿にせず、裕福な者は貧しい者を見下さない。人民があまねく良くなり、官吏が侵犯しなければ、人民は仲よく政治は公正なものとなります。強大な勢力によって（他国の）人々の君主を退位させず、数の力で人々の領地を支配下に治めたりもしません。法を適用するにはその時の（状況を良くする）ために乱暴な行為を禁止するので、よって世はその意志に逆らいません。武力を用いるには多くの人々のために危険を取り除くので、よって人民は兵役での労苦を恨みません。これが長く強大な勢力を保って失うことがないようにする方法です。これを誤る者は危ういでしょう」と。呉王はいきどおり顔色を変え、嬉しく思わなかった。晏嬰が言うには、「我が主君から賜わった務めは終わりました。私には刑罰にあう罪もありません。お別れのご挨拶をして帰らせてください」と。とうとう二度と（晏嬰が呉王に）お目にかかることはなかった。

二

月は昭陽殿の上に明るく輝き
霜は長信宮に清らかに降りている
天子の行幸は御輿に乗り
飛燕が天子と同行する
さらに喜び楽しむことがあり
（飛燕は天子の）寵愛を受けて楽しみはいつまでも続く
誰が団扇の（ような）私を憐れむであろうか
一人座って秋風をうらめしく思っているのを

これは班婕妤が（天子の）寵愛を失い（今、寵愛を受けている）趙飛燕を羨む詩である。月が昭陽殿に明るく輝くというのは、昭陽殿の美しい景色である。霜が長信宮に清らかに降りているというのは、自分の落ちぶれて寂しいさまである。天子様が輿に乗られる時には、かつて私〔＝班婕妤〕と一緒に乗られようとされたが、今ではなんと趙飛燕と同行されている。しかも喜び楽しむことは一つではなく、寵愛を受け寝所に侍り、その楽しみは尽きることがない。誰が団扇の（ような）私が、一人座って秋風をうらめしく思っているのを憐れむであろうか、いや、憐れまない。思うに李白が（帝に）召されて翰林院に出仕した時、帝はみずから李白に温かなスープを調理したが、その後、（李白は）楊貴妃に誹謗中傷され、（その結果、帝の）恩寵は日に日に衰え、よって班婕妤にたとえて自ら嘆いた。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。